地域的独自性を通じた民族的一体性への貢献 ―第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールの学術機関を事例に（1940-44 年）―

辻河 典子

はじめに

第一次世界大戦で敗戦国となったハンガリーは、講和条約として 1920 年 6 月にトリアノン条約に調印した。この条約は翌年 7 月末に関係各国の間で批准書が交換されて発効し、大戦前のカルパチア盆地を中心とした同国領（いわゆる歴史的領土）の約三分の二が周辺の継承諸国家（チェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、オーストリア）に割譲された。その結果、約 300 万人のハンガリー語話者が周辺国に在住することとなった。このため、戦間期ハンガリーではトリアノン条約の修正と領土回復が最重要な外交課題であった。

1933 年以来ナチス・ドイツへ接近したハンガリーは、1939 年 2 月には防共協定に参加して枢軸国陣営に組み込まれていく。ハンガリーはドイツの影響下で国境線の変更に成功し、1938 年 11 月の第一次ウィーン裁定で旧上部地方〔Felvidék〕のうち南スロヴァキアとルテニア地方の一部（翌年 3 月に軍事侵攻によりルテニア地方全域を併合）を、1940 年 8 月の第二次ウィーン裁定ではトランシルヴァニア〔Erdély〕の北部を再び領内に収めることとなった。更に 1941 年 4 月、ハンガリーはユーゴスラヴィアに侵攻して第二次世界大戦に参戦し、旧南部地方〔Délvidék〕の北部などを占領する。再びハンガリーの統治下に入った地域では様々な再統合政策が採られた。なお、これらの部分的に「達成」されたハンガリーの「領土修正」は、第二次世界大戦の講和条約であるパリ条約により全て無効とされた。

本稿では、トランシルヴァニアの代表的な文化都市であり、第二次ウィーン裁定後にハンガリー領となった北トランシルヴァニア〔Észak-Erdély〕に属したコロジュヴァール〔クルジュ、現クルジュ・ナポカ〕に注目し[1]、ハンガリー政府による学術面での「再統合」政策とそれに対するコロジュヴァールの知識人たちの対応の特徴について考察する。北トランシルヴァニアは 1944 年 10 月にはルーマニア軍および赤軍に占領されるため、本稿で主に論じるのは北トランシルヴァニアがハンガリーの統治下にあった 1940 年 9 月から 1944 年夏までとする。

[1] 本稿では日本語での慣例に従ってルーマニア語表記のトランシルヴァニアを用いるが、トランシルヴァニアの各都市名は慣例表現があるとは言いがたいため、ハンガリー統治下の時期についてはハンガリー語名で表記する。その他の地名に関しても適宜両言語で併記する。ハンガリー語話者に関しては国籍や時期を問わず姓・名の順で表記する。

ENSG に掲載された論文等の文章の著作権は著者と ENSG 編集委員会がともに保持する。無断転用・転載を禁じる。
Copyright ©2017 by individual author and ENSG editorial board. All Rights Reserved. This material may not be published or reproduced without permission.

第二次ウィーン裁定後のトランシルヴァニアについては[2]、当事者の回顧録[3]や概説的な紹介に加え[4]、外交[5]、領土修正主義も含めた民族的少数派をめぐる諸問題[6]などをテーマとして様々に議論されてきた。近年の研究では、これらの「領土修正の部分的達成」が実現された境界地域をハンガリーへと再統合するために知的・経済的資源が動員された状況の分析が取り上げられるとともに[7]、境界地域の知識人たちが政府の思惑とは異なる独自の活動を見せていた点についても考察が進んでいる。

特にエグリ・ガーボルの諸研究は、トランシルヴァニアを拠点とした政治的・知的エリートの動向がハンガリー政府の意向とは必ずしも一致していなかった状況を明らかにする[8]。トランシルヴァニアをめぐる表象から 1920 年代から第二次世界大戦期までのハンガリー国内とトランシルヴァニアとの関係を考察した彼の論文では[9]、19 世紀以降に「ハンガリー人」としての共通性や一体性とトランシルヴァニアの歴史的・地理的独自性との間で緊張関係が存在してきたことを示した上で、前者を重視したハンガリー政府側からハンガリー人のカルパチア盆地での民族的使命の受容を働きかけられたトランシルヴァニアの政治的・知的エリートがそれに必ずしも合意せず、戦間期の彼らが経験した社会再編の成果を全ハンガリー人に届けることを課題としたことが示されており、本稿のテーマとも深く関わる。

一方で、1940 年秋から 1941 年末にかけてハンガリーで行われた学術機関の再編がコロジュヴァールの知識人たちにもたらした影響については、十分に議論されてきたとは言いがたい。特にトランシルヴァニア学術研究所〔Erdély Tudományos Intézet〕は 1940 年秋のコロジュヴァール大学の「再開」に併せて設立され、翌年 12 月にはブダペシュトの政治学研究所と歴史学研究所と並んでテレキ・パール学術研究所

---

[2] 全体的な研究動向は Tóth-Bartos András, „Észak-Erdély 1940-1944. Szakirodalmi áttekintés", *Limes*, 25.évf. 2.sz., 2012, 51-64 に詳しい。

[3] Bethlen Béla, Észak-Erdély kormánybiztosa voltam, Budapest, Zríny Katonai Kiadó, 1989; Rónai, András, *Térképezett történelem*, Budapest, Püski, 1989.

[4] Ablonczy Balázs, *A visszatért Erdély 1940-1944*, Budapest, Jaffa Kiadó, 2011. アブロンツィや後述するティルコフスキには第二次ウィーン裁定の締結当時の首相だった地理学者テレキ・パールに関する研究もあり、その中で彼の対トランシルヴァニア政策への言及も見られる。Ablonczy, Balázs, *Teleki Pál*, Budapest, Osiris Kiadó, 2005 [*Pál Teleki (1874-1941): The Life of a Controversial Hungarian Politician*, New York, Columbia University Press, 2006]; Tilkovsky Loránt, *Teleki Pál: legenda és valóság*, Budapest, Kossuth Könyvkiadó, 1969 [*Pál Teleki: A Bibliographical Sketch*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1976]; Id., *Teleki Pál titkozatos halála*, Budapest, Helikon, 1989; Id., „Teleki Pál-- ahogy a történesz látja (Teleki Pál emlékezete)", *Földrajzi Közlemények*, 125 (49) (1-2), 2001, 13-20.

[5] L. Balogh Béni, *A magyar-román kapcsolatok 1939-1940-ben és a második bécsi döntés*, Csíkszerda, Teleki László Intézet, Pro-Print Könyvkiadó, 2001 [*The Second Vienna Award and the Hungarian-Romanian Relations 1940-1944*, New York, Columbia University Press, 2011]; Seres Attila, „Márton Áron és a kisebbségi reciprocitás kérdése a magyar-román kapcsolatokban: Magyar diplomáciai iratok 1940-1943", *Limes*, 24. évf. 2.sz., 2011, 75-96.

[6] 主なものとして Csatári Dániel, *Forgószélben: Magyar–román viszony, 1940- 1945*, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1968; Tilkovszky Lóránt, *Revizió és nemzetiségpolitika Magyarországon 1938-1941*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1967; Benkő Levente, „Magyar nemzetiségi politika Észak-Erdélyben (1940-1944)", Pro minoritate, 2002. Ősz. 7-41; Horváth, Franz Sz., "Minorities into Majorities: Sudeten German and Transylvanian Hungarian Political Elites as Actors of Revisionism before and during the Second War", in Marina Cattaruzza, Stefan Dyroff and Dieter Langewische (ed.), *Territorial Revisionism and the Allies of Germany in the Second World War: Goals, Expectations, Practices*, New York/Oxford, Berghahn Books, 2013, 30-55; Egry Gábor, *Etnicitás, identitás, politika: Magyar kisebbségek nacionalizmus és regionalizmus között Romániában és Csehszlovákiában 1918-1944*, Budapest, Napvilág Kiadó, 2015.

[7] 例えば Halász Aladár, *Erdészettörténet a visszacsatolt országrészekről 1938-1944*, Erdészettörténeti közlemények 71, Budapest, Innova-Print, 2007 は第一次ウィーン裁定以降に再びハンガリー領となった地域の再統合政策を林業に注目して論じる。

[8] 特に Egry, *Etnicitás, identitás, politika* は R.ブルーベイカーの「集団主義〔groupism〕」への批判や、P. M.ジャドソンや T.ザーラらによる境界地域の住民に注目した諸研究も参照しながら、トランシルヴァニアとスロヴァキアのハンガリー系地域エリートの動向を扱う。

[9] Egry Gábor, „Erdély-képek és mítoszok," Romsics Ignác (szerk.), *A magyar jobboldali hagyomány 1900-1948*, Budapest, Osiris Kiadó, 2009, 506-533.

の一つとして再編された学術機関であるが、史料的な制約もあり[10]、開設当時の講演録[11]、当事者による回顧[12]、紹介記事[13]、トランシルヴァニアにおける学説史の観点からの論考[14]が見られるにとどまっている。これらの文献からは同研究所が第二次ウィーン裁定後の北トランシルヴァニアにおけるハンガリー文化研究の一つの拠点であったことは示されるものの、同時期のハンガリー政府の諸政策との関係についての言及は少なく、同時期にコロジュヴァールに存在した他の主要学術機関（コロジュヴァール大学[15]とトランシルヴァニア博物館協会[16]）との競合についての考察も十分になされているとは言いがたい。トランシルヴァニア学術研究所の設立がハンガリーへの「再統合」のための知的資源の動員を目的としたものであれば、その状況への現地の知識人たちの対応を分析することは、ハンガリーの「領土修正の部分的達成」後の実態を考察する上で重要な手がかりとなる。

政治と学知との関わりについて、例えば青島陽子は主にソ連を事例として、社会主義における学知が、世界各地に拡大した普遍的なイデオロギーである社会主義と固有性を持つ土着の社会とを結び、新たな空間的単位を構築する役割を果たしていたことを指摘する[17]。本稿はこれと類似の問題意識にもとづき、1940 年代前半のハンガリーを事例として、ハンガリー・ナショナリズムとトランシルヴァニア社会を繋ぐ学知の役割に注目し、そこから浮かび上がるトランシルヴァニアという空間の特徴を考察する。主に取り上げるのは、コロジュヴァールを拠点に活動した言語学者サボー・T・アティッラ（1906-1987 年）の論考である。まずは議論の前提として、第二次ウィーン裁定後のトランシルヴァニアをめぐる状況と 1940 年代前半までのハンガリー政府の学術政策を境界認識の観点から確認する。次に、サボー・T・アティッラの論考から、トランシルヴァニア博物館協会、コロジュヴァール大学、トランシルヴァニア学術研究所の各機関に対する彼の認識を整理した上で、当時のコロジュヴァールにおける学問や高等教育についての彼の展望を明らかにする。最後に民族学者ミケチ・ラースローによるトランシルヴァニア学術研究所への批判と比較し、そうした展望がトランシルヴァニアの地域的独自性を主張する立場の反映であることを示したい。

---

[10] 国立外国語図書館 Országos Idegennyelvű Könyvtár が所蔵するトランシルヴァニア学術研究所の活動に関する史料も 1940-41 年の史料に限られる。

[11] 例えば Bisztray Gyula, Szabó T. Attila és Tamás Lajos, *Erdély magyar egyeteme: Az erdélyi egyetemi gondolat és a M. Kir. Ferenc József Tudományegyetem története*, Kolozsvár, Az Erdélyi Tudományos Intézet, 1941.

[12] 例えば Imreh István, „Az Erdélyi Tudományos Intézet és a tájkutatás”, *Korunk*, 3. folyam (1994), V/9., 17-21.

[13] 例えば Für Lajos, „Magyarságkutatás a két háború között”, Rácz István (szerk.), Parasztság és magyarság: Tanulmányok Szabó István történetíró születésének 90. évfordulója tiszteltére, Debrecen, Kinizsi Mgtsz Szakszövetkezet, 1989, 79-93.; Benkő Samu, „Az Erdélyi Tudományos Intézet”, *Valóság*, 1992. 4., 62-72.

[14] 例えば Székedi Levente, „A romániai magyar szociológia átalakulása a második világháborút követő években”, *Pro Minoritate*, 2015. tavasz, 40-47.

[15] ハンガリー王立フェレンツ・ヨージェフ大学 M. Kir. Ferenc József Tudományegyetem。本稿ではコロジュヴァール大学で統一する。近代的な大学としては 1872 年に設立され、第一次世界大戦後のルーマニア統治下では閉鎖された。ハンガリーは 1921 年にコロジュヴァール大学をセゲドへ、第一次世界大戦後にチェコスロヴァキア領となったブラティスラヴァ〔ポジョニ〕にあった大学をペーチへ「移転」させた。第二次ウィーン裁定後の 1940 年 10 月下旬、コロジュヴァール大学は「再開」された。

[16] Erdélyi Múzeum-Egyesület。ハンガリー国民博物館の設置を求めてコロジュヴァールで 1859 年に設立された組織。第一次世界大戦後はルーマニア政府からの干渉を受けるが、1930 年代からは新たな体制の下で活動を行っていた。

[17] 青島陽子「学知はソ連体制をどう構築したか？—自然科学、歴史学、建築学、地理学を手がかりに」、『地域研究』第 10 巻第 2 号、2010 年、6-13。同号では「社会主義における政治と学知：普遍的イデオロギーと社会主義体制の地域化」と題した特集が組まれている。

1. トランシルヴァニアをめぐるハンガリーの領土修正と学知

1.1. 第二次ウィーン裁定と「北トランシルヴァニア」の成立

本稿での「トランシルヴァニア」とはカルパチア盆地東端部、第一次世界大戦後にルーマニア領となった旧ハンガリー王国領を指す[18]。12 世紀にはトランシルヴァニアへのハンガリー王国の支配が強まるが、ルーマニアのナショナル・ヒストリーではルーマニア人の起源はローマ帝国の属州ダキアのダキア人とローマ人の混血から生まれたダコ・ロマン人にあるとされ、近代以降はハンガリーとルーマニアの間でその領有が争われてきた。

戦間期の中央・東ヨーロッパ情勢は、フランスがポーランド、チェコスロヴァキア、ルーマニアなどパリ講和会議で有利な条件を獲得した国々と同盟を結ぶことで維持されてきた。1930 年代に入るとこの状況は崩れ始め、1940 年 6 月にフランスがドイツに降伏すると、ルーマニアは国際的な後ろ盾を失った。その結果、ルーマニアの領土をめぐるソ連とドイツの対立、更にはルーマニアと領土問題を抱えるハンガリーやブルガリアからの領土修正要求が強まった。1940 年 8 月にドイツはイタリアと第二次ウィーン裁定を行い、ルーマニアからハンガリーへのトランシルヴァニア北部の割譲を定めた。

第二次ウィーン裁定に対して、ハンガリー側では歓迎の一方で部分的「領土回復」への不満の声も聞かれ、ルーマニア側では強い反発が生じた[19]。裁定の履行の過程では暴力事件が頻発し、最終的にはドイツ軍将校 2 名とイタリア軍将校 2 名から成る軍事委員会の監督下でルーマニア軍の撤退とハンガリー軍の進駐が行われた[20]。ハンガリー領北トランシルヴァニアでもルーマニア領南トランシルヴァニアでも民族的少数派の問題は深刻化し、双方で民族的少数派住民の相手側への強制的な移送が繰り返された[21]。こうした民族的少数派への暴力はドイツ、イタリアの仲介と北トランシルヴァニアでの文民行政の導入により 1940 年 11 月以降は収束に向かうが、ハンガリーとルーマニアの両政府による各支配領域内での民族的少数派の生活の継続が困難になる政策が行われる状況は、ハンガリーの北トランシルヴァニアでの統治が崩れる 1944 年の秋まで続いた[22]。

ハンガリー政府は北トランシルヴァニアの統治において、建前上は「聖イシュトヴァーン」の伝統の採用、すなわち様々な言語話者が居住するカルパチア盆地をハンガリー王国が支配してきた歴史にもとづいて個々の住民の母語使用を容認しており、北トランシルヴァニアからのルーマニア人少数派の追放や住民交換による問題解決は意図しない傾向にあったとされている[23]。しかし、実際には当局からの商工業、公務員、弁護士などに従事するルーマニア人に対する差別など、北トランシルヴァニアでのルーマ

---

[18] このトランシルヴァニアは、1867 年にハンガリー王国と合同する旧トランシルヴァニア侯国の領域（地理的および歴史的トランシルヴァニア）、17 世紀にトランシルヴァニア侯国に編入されたパルティウム Partium、これらの地域には属しないが第一次世界大戦後にルーマニアへ編入された領域の三つに大別できる。パルティウムはラテン語で「諸部分」の意で、17 世紀末までオスマン帝国の統治下にあったトランシルヴァニア侯国と、ハプスブルク家の統治下に入っていたハンガリー王国との間の領域を指した。Rónai András, *Térképezett történelem*, Budapest, Magvető Könyvkiadó, 1989, 203-206.

[19] 詳細は L. Balogh, *The Second Vienna Award and the Hungarian-Romanian Relations 1940-1944*, 240-260.

[20] *Ibid.*, 276-283.

[21] *Ibid.*, 312-317.

[22] *Ibid.*, 424.

[23] *Ibid.*, 424-431.

ニア人少数派への抑圧は様々に行われていた[24]。ハンガリーと北トランシルヴァニアとの結びつきを強化するためにインフラ整備などの開発も行われた[25]。

一方、ルーマニア政府も南トランシルヴァニアのハンガリー人少数派に対して経済的な抑圧、母語使用の制限などの政策を採った。ルーマニア語新聞や北トランシルヴァニアからのルーマニア人避難民によって引き起こされた反ハンガリー的な世論や、国家ないし地方当局からの抑圧的な政策により、1940 年 8 月から 1944 年 2 月までに約 20 万人のハンガリー人少数派がハンガリー側へ逃れた[26]。第二次ウィーン裁定後の南トランシルヴァニアのハンガリー語文化は、トランシルヴァニアでのハンガリー文化の中心であったコロジュヴァールがハンガリーに編入されたことでその繋がりを失って衰退し、当局による検閲や移動の制限、公共の場での集会の禁止によって機能しなくなった。

なお、本稿の舞台となるコロジュヴァールの南境に位置するフェレク Felek〔フェレヤク Feleacu〕が新たなハンガリー・ルーマニア国境に面していた[27]。第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールは、ハンガリー・ルーマニア間の対立の最前線の地域に位置しながら、引き続きトランシルヴァニアにおけるハンガリー文化の拠点という性格を有していたことになる。

1.2. 領土修正と学知、およびトランシルヴァニア学術研究所

第二次ウィーン裁定での国境線は、政治学研究所〔Államtudományi Intézet〕が作成した地図に示された民族境界線と大半が一致していた[28]。政治学研究所は、1920-21 年と 1939-41 年に首相を二度務める地理学者のテレキ・パール Teleki Pál のイニシアティブにより 1926 年に設立された。戦間期ハンガリーで講和条約および領土の修正が最重要な外交課題のひとつであったことに対応して、学術界でもハンガリーの領土修正を理論的に根拠づけるための動きが見られた。そうした動向の中で、テレキを中心とする地理学および関連分野の研究者たちは非常に大きな役割を果たした[29]。

歴史学者とハンガリーの領土修正主義との結びつきも見られた。1927 年 9 月に創刊された保守系論説誌『ハンガリー評論』には当時のハンガリー首相ベトレン・イシュトヴァーン Bethlen István が深く関わった。戦間期ハンガリーを代表する保守派の歴史家であったセクフュー・ジュラ Szekfű Gyula も同誌の編集長を務め、『ハンガリー評論』は当時のハンガリーの政治、社会、文化をめぐる公的な議論の場と

---

[24] *Ibid.*, 431-436.
[25] Ablonczy, *A visszatért Erdély 1940-1944*, 175-187.
[26] L. Balogh, *The Second Vienna Award and the Hungarian-Romanian Relations 1940-1944*, 436.; Thirring Lajos, „A romániai menekültek főbb adatai az 1944. februári összeírás szerint”, *Statisztikai Szemle*, 1944, 9-12.sz., 410.
[27] Ablonczy, *A visszatért Erdély 1940-1944*, 46.
[28] L. Balogh, *The Second Vienna Award and the Hungarian-Romanian Relations 1940-1944*, 231.
[29] 彼は 1924 年に当時のベトレン政権から要請を受けてハンガリー科学アカデミーの監督下で中央ヨーロッパ各国の経済地理学や人口地理学の関係から研究を行う社会誌学研究所〔Szociográfiai Intézet〕を設立し、1926 年にはハンガリー統計協会〔Magyar Statisztikai Társaság〕の支援を受けて継承諸国家の統計局のデータの収集および解析、公的刊行物の収集を行う政治学研究所を設立した。これらの機関は中央統計局〔Központi Statisztilai Hivatal〕と同じ建物内に置かれた。Rónai, *Térképezett történelem*, 113. 中央統計局は 1867 年に農業・産業・通商省内に設立された統計部門が前身で、国勢調査の実施などの国家運営に関わる統計の作成に従事する。中央統計局の歴史は同局の web サイト内の「歴史年表」に詳しい。http://www.ksh.hu/mult_torteneti_kronologia（2017 年 6 月 30 日閲覧。以下の web ページも全て同様。）また、戦間期からハンガリー統計協会が刊行する機関誌『統計雑誌』はハンガリー社会の統計的な把握と分析において大きな役割を果たしている。Tiner Tibor, „A földrajztudomány 1945-ig ”, Kollega Tarsoly István (főszerk.), *Magyarország a XX. században IV. kötet: Tudomány 1. Műszaki és természettudományok*, Szekszárd, Babits Kiadó, 2000, 349.
http://mek.oszk.hu/02100/02185/html/822.html

して機能した[30]。また、ハンガリー歴史協会〔Magyar Történelmi Társulat〕が第二次ウィーン裁定直前の1940 年 8 月初旬に刊行した論集『トランシルヴァニア』[31]には、歴史学者に限らず地理学者や言語学者も寄稿した。各論考ではトランシルヴァニアとハンガリー本国との歴史的一体性が主張された。同書の序文ではそのプロパガンダ的性格が否定されたものの、冒頭で「ヨーロッパの公正な再編の前夜において、我々が真実の諸武器を取り出し、ハンガリー人民の血と知識によって獲得された諸法および過去に証明された民族の諸努力を自然や歴史の諸真実の公言によって支援しようという時が到来した。これがこの著作の刊行によるハンガリー歴史協会の目的である」と述べられた[32]。同論集には、当時の首相であったテレキ、宗教・公教育相だった歴史家ホーマン・バーリント Hóman Bálint が「カルパチア盆地の一体性」と題されたセクションで寄稿した[33]。これらを考慮すれば、この論集はトランシルヴァニアをルーマニアが領有することを否定してハンガリーへの再帰属の要求を正当化するためのプロパガンダ的な性格を有していたと言える。同書に寄稿した言語学者のタマーシュ・ラヨシュ Tamás Lajos は後にトランシルヴァニア学術研究所の初代所長となる。

第二次ウィーン裁定後の政治学研究所は、1938-39 年の国境線変更時よりも多くの課題を抱え、事実上の公的組織となった。1940 年 10 月 23 日、テレキ首相はかつての教え子でもある地理学者ローナイ・アンドラーシュ Rónai András 宛に政治学研究所の所長を委託する書簡を送り、その中で領土修正の交渉に貢献したそれまでのローナイの仕事を高く評価した[34]。

一方、1940 年 11 月初旬には、コロジュヴァール大学とトランシルヴァニア学術研究所の人事が宗教・公教育省から発表された。トランシルヴァニア学術研究所はホーマン宗教・公教育相が「ハンガリーと特にトランシルヴァニアの地理、民族誌、言語、歴史、社会ならびに他の人民の諸問題、および他の国々の人民との諸関係について学術的な研究を行う目的から」コロジュヴァールに設立を定めた機関であった[35]。同学術研究所には地理学、民族学、歴史学、考古学、社会学、言語学、ハンガリー人・ルーマニア人関係、ハンガリー人・サース人（ザクセン人）関係、文学、人類学、心理学の 11 の部門が設けられ、各部門の活動計画も作られた[36]。

トランシルヴァニア学術研究所の所員には、ブダペシュトを拠点としてテレキ首相と近しい人物も複数含まれていた。その中には高等教育をコロジュヴァールで受けた人物も複数いた。一方、後述するサボー･T のように戦間期トランシルヴァニアでハンガリー文化の振興のための活動を続けたトランシルヴァニア博物館協会の中心的な会員など、トランシルヴァニアで活動する者もいた。また、セゲド大学から異動した研究者も含まれた。ホーマン宗教・公教育相は 1940 年 10 月 19 日付で先の論集『トランシル

---

[30] 同誌の戦間期ハンガリーにおける保守系の論壇としての地位の高さについては、例えば Saád József, „A reformkonzervativizmus lapja”, *Magyar Szemle*, 6.évf. 11-12.sz., 1997, 23-37.に詳しい。
[31] Deér József (szerk.), *Erdély*, Magyar Történelmi Társulat, 1940.
[32] „Bevezető” in *Erdély*, 5.
[33] Teleki Pál, „Erdély helyzete Magyarországon és Európában”, in *Erdély*, 9-20.; Hóman Bálint, „A magyarság töréneti hivatása”, in *Erdély*, 21-36.
[34] Rónai, *Térképezett történelem*, 256.
[35] *Hivatalos Közlöny*, XLVIII. évf., 21.sz., 1940. november 1., Magyar királyi vallás- és közoktatásügyi minisztérium, 414.
[36] Tamás Lajos„Az Erdélyi Tudományos Intézet” in Bisztray Gyula, Szabó T. Attila és Tamás Lajos (szerk.), *Erdély magyar egyeteme: Az erdélyi egyetemi gondolat és a M. Kir. Ferenc József Tudományegyetem története*, Kolozsvár, Az Erdélyi Tudományos Intézet, 1941, 412-415.　サース人（ザクセン人）はトランシルヴァニアのドイツ語話者。中世以降のトランシルヴァニアで、ハンガリー人貴族、辺境防衛を担ったハンガリー語話者のセーケイ人と共に特権身分を構成した。

ヴァニア』の編集代表者となったデール・ヨージェフ Deér József と政治学研究所の所長となったローナイをトランシルヴァニア学術研究所の設立に関するブダペシュトでの準備業務に当たらせる指示を出した[37]。このように、宗教・公教育省主導で設立されたトランシルヴァニア学術研究所では、政権に近しくブダペシュトでの準備作業に携わる研究者、ブダペシュトから派遣される研究者（政権に近しい人物も多い）、戦間期からコロジュヴァールを拠点とした研究者、ならびにセゲド大学から異動した研究者が協力する形式で、トランシルヴァニアのハンガリー文化研究の一大拠点となることが目指された。

1.3. テレキ・パール学術研究所の設立

1941 年に入ると、政治学研究所ではテレキの下で第二次世界大戦後の交渉に備えた資料の準備が新たな課題となり、図書館等の設備の拡充とともに地図資料の作成が進められた[38]。しかし 1941 年 4 月初旬のテレキの自殺により、この状況は大きく変化した。当時のハンガリー政府は、ドイツによるユーゴスラヴィア攻撃のためのハンガリー領内の通過許可ならびに北セルビアの支配回復を条件としたハンガリーのバルカン方面作戦への参加要請を受けていた。テレキの自殺はドイツ軍によるユーゴスラヴィア侵攻への抗議を示した。その直後にハンガリーは第二次世界大戦に参戦する。

テレキの自殺後、彼が創立以来深く関わってきた諸学術機関の再編が行われた。ホーマン宗教・公教育相は政治学研究所に対して手厚い支援を行い、同研究所を自立した研究機関として位置づけただけでなく、ブダペシュトに新たに歴史学研究所〔Történettudományi Intézet〕を開設し[39]、コロジュヴァールのトランシルヴァニア学術研究所と併せて、1941 年 12 月にこれら三つの独立した研究所からなる研究所の集合体をテレキ・パール学術研究所〔Teleki Pál Tudományos Intézet〕として成立させた[40]。

この研究所の課題は「ハンガリー人ならびにハンガリー人と共に生きる隣人の諸人民の生活の——その歴史の、国家および社会のシステムの、経済および文化の状況の——方法論的な研究と周知」であり、関連分野の研究者たちとの関係については「その活動においては他の諸機関や諸協会との協働を認め、それらの類似の性格を有した諸研究を支援する」こと、「その職務に割り当てられた学術的諸問題における専門家の組織として当局の裁量に任されている」ことが定められた[41]。政治学研究所長だったローナイが「二つの関連研究所とは友好的な関係以外に我々は結びつきがなかった」、「二つの研究所の体制、

---

[37] *Hivatalos Közlöny*, 1940. november 1., 414.　同じ官報でローナイはホーマン宗教・公教育相からコロジュヴァール大学経済学部の政治地理学講座の正教授に指名されたが、彼は政治学研究所の指揮をブダペシュトで執るために引き受けなかった。*Hivatalos Közlöny*, 411.; Rónai, *Térképezett történelem*, 256-257.　その後、ローナイは同年末に母校でもあるブダペシュトのヨージェフ・ナードル工科・経済大学〔現ブダペシュト工科大学〕に経済学部の政治地理学講座の教授として招聘され、1941 年から政治学研究所の業務と並行して講義を担当した。Rónai, *Térképezett történelem*, 275-276.

[38] Rónai, *Térképezett történelem*, 275-277.

[39] 同研究所は現在のハンガリー科学アカデミー歴史学研究所の前身として位置づけられ、2012 年作成の同研究所の web ページでも「ハンガリー科学アカデミー歴史学研究所は、1941 年に設立されたテレキ・パール研究所の歴史部門から 1949 年に設立され、〔…〕」と明記されている。„Küldetésnyilatkozat", A Magyar Tudományos Akadémia Történettudományi Intézete, 2012. március 25.
https://tti.btk.mta.hu/intezetunk/rolunk/kuldetesnyilatkozat.html

[40] „A m. kir. miniszterium 8.646/1941. M. E.szanni rendelete", *Hivatalos Közlöny*, XLIX. évf., 24.sz., 1941. december 15., 713-715. (Megjelent a *Budapesti Kozlony* 1941. evi folyamanak 278. szamaban.)

[41] „A m. kir. miniszterium 8.646/1941. M. E.szanni rendelete", 713-714.

活動領域、構成、目標、所員数は全く異なっていた」と回顧録で述べるように[42]、テレキ・パール学術研究所に属する三つの研究所の活動は独立していた[43]。

トランシルヴァニア学術研究所について、ホーマン宗教・公教育相は 1941 年 11 月 19 日にテレキ・パール学術研究所の設立に関する宗教・公教育省令の草案を閣議に示して、「政治学研究所で進行中の研究に加え、トランシルヴァニア北部の返還と現地に存在する特殊な状況により、トランシルヴァニアで生活するハンガリー人と他の諸人民の現在と過去に関連する諸情報の収集、記録、学術的な評価と分類が必要となった。この課題の専門的で継続的な備えのために 1940 年にトランシルヴァニア学術研究所が設立された」と説明していた[44]。先述の通り、南北に分かれたトランシルヴァニアではハンガリー政府とルーマニア政府の双方が互いの支配領域内に住む民族的少数派の問題をめぐって対立し、コロジュヴァールは両国の国境線に近接していた。トランシルヴァニア学術研究所がコロジュヴァール大学内の機関として設立された経緯も併せると、ハンガリー政府（特にホーマン宗教・公教育相）が同研究所を通じてハンガリー文化圏の一角としてトランシルヴァニアを位置づけるための学術的裏付けを国内外に示そうとしていたことが読み取れる。

2. サボー・T・アティッラの著作にみるトランシルヴァニアの学術機関の理念

2.1. サボー・T・アティッラの経歴[45]

本章では、コロジュヴァールを拠点に活動した言語学者サボー・T・アティッラ（1906-1987 年）の論考を主に参照しながら、第二次ウィーン裁定後のトランシルヴァニアをめぐる学知の役割を通じて浮かび上がるトランシルヴァニア像の特徴を考察する。

サボー・T・アティッラは 1906 年に当時はハンガリー領だったトランシルヴァニア中部マロシュ県のフェヘールエジハーザ Fehéregyháza〔現ルーマニアのアルベシュティ Albești〕に生まれた。幼少期をデーシュ Dés〔デジュ Dej〕で暮らした後、コロジュヴァールの改革派学寮、大学、改革派神学研究所でプロテスタント神学を学び、スコットランドのエディンバラ大学とセント・アンドリュース大学にも留学した。コロジュヴァールでは、言語学者のチューリ・バーリント Csűry Bálint、神学者のタヴァシ・シャーンドル Tavaszy Sándor、歴史学者のケレメン・ラヨシュ Kelemen Lajos らに師事した[46]。

彼は 1926 年からトランシルヴァニア博物館の文書館で研究を開始した。チューリの勧めでハンガリー語の歴史や方言の研究を始めた彼は、1929 年にはチューリと共にモルドヴァのハンガリー語話者であるチャーンゴー人の社会調査を行う。1930 年代にアイウド Aiud〔ハンガリー語でナジエニェド Nagyenyed〕

---

[42] Rónai, *Térképezett történelem*, 302.

[43] ローナイによれば、来たるべき講和会議ではおそらく第一に地理的・経済的諸関係が重要なテーマになる（歴史についての諸関係の重要度はより小さい）と考えられていたので、ホーマン宗教・公教育相は講和会議への学術的な準備は引き続き政治学研究所所長のローナイの指揮下で行うことを委託していた。Rónai, *Térképezett történelem*, 303-304.

[44] Magyar Nemzeti Lévéltár Országos Levéltár K27(Minisztertanácsi jegyzőkönyvek) 1941.11.19.

[45] 以下の記述は Kenyeres Ágnes (főszerk.), *Magyar Életrajzi Lexikon 1000-1990 I-IV*, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1967-1994 のハンガリー国立図書館作成によるオンライン版〔http://mek.oszk.hu/00300/00355/html/index.html〕の„Szabó T. Attila”の項を参照した。

[46] Ibid.

とザラウ Zalău〔ハンガリー語でズィラフ Zilah〕で短期間教員を務めた後、彼はケレメンと共にトランシルヴァニア博物館の文書館員として活動する[47]。

第二次ウィーン裁定後の彼は、1942 年からコロジュヴァール大学で言語学を教えながらトランシルヴァニア博物館とトランシルヴァニア学術研究所を主導し、それぞれの機関誌である『トランシルヴァニア博物館』と『トランシルヴァニア学術パンフレット』の編集長も務めた。1941-43 年にはバールツィ・ゲーザ Bárczi Géza と『ハンガリーの人民の言葉』を刊行し、地名の収集と方言研究に従事した[48]。この時期にはトランシルヴァニアでのハンガリー語やハンガリー文化の探索を目指した社会調査が盛んに行われ、言語学者だけでなく民族学者、人類学者なども参加した。代表例がトランシルヴァニア学術研究所によるボルシャ谷の調査である。

第二次世界大戦後に再びルーマニア領となったクルジュ〔コロジュヴァール〕では、1945 年にハンガリー語大学としてボヤイ大学が設立された。サボー・T もこの大学で一時期を除いて教員を続けた。1959 年にボヤイ大学はヴィクトル・バベシュ大学[49]と統合されてバベシュ・ボヤイ大学に再編されるが、彼は 1971 年の退職まで同大学で教えた。また彼はハンガリー語史の研究を 1987 年に亡くなるまで精力的に続け、1975 年からは彼を編者とした『トランシルヴァニア・ハンガリー語源集』が刊行された[50]。

以上のように、サボー・T・アティッラは 1930 年代以降、ハンガリー言語史・方言研究において重要な役割を果たした。本稿との関連では、第二次ウィーン裁定後にハンガリー領となった 1940 年代前半のコロジュヴァールで、彼がトランシルヴァニア博物館とトランシルヴァニア学術研究所でのハンガリー言語学に関する分野を主導し、コロジュヴァール大学の教員でもあったことから、各学術機関の研究者を結びつける形で社会調査に深く関わり、現地のハンガリー語・ハンガリー文化の研究を行う中心人物の一人として活動した点を指摘しておく必要があるだろう。

2.2. 戦間期トランシルヴァニアでの研究環境への認識

1940 年代前半のサボー・T・アティッラの研究活動の前提として、1938 年にトランシルヴァニア博物館協会の法・社会学部門が開いた連続講演「社会調査の百年」の中で彼が行った講演「トランシルヴァニアのハンガリー人の社会研究」[51]から、戦間期トランシルヴァニアにおけるハンガリー語での研究環境に対する彼の認識を踏まえておきたい。

この講演で、彼は 18 世紀末から当時までの約 150 年間のトランシルヴァニア社会に関する研究動向を整理し、最後に当時の彼らのトランシルヴァニア社会の研究環境の課題を述べた。彼は当時のトランシルヴァニアでは社会研究が真には実現されていないと考えており、その理由として、彼らの間で学術政策〔tudománypolitika : 学術研究を進めるための様々な指針の意だと考えられる〕が全く存在しないこと、および、それと密接かつ相互に関わり合う形で学問を担う人々が輩出されていないことを指摘した[52]。彼

[47] Ibid.
[48] Ibid.
[49] 1919 年 5 月にクルジュではルーマニア語で教授する大学としてフェルディナント 1 世大学（後にヴィクトル・バベシュ大学と改称）が設立された。同大学は第二次ウィーン裁定後に南トランシルヴァニアのシビウ Sibiu〔ナジセベン Nagyszeben〕へ移転し、第二次世界大戦後にクルジュに戻る。
[50] „Szabó T. Attila” http://mek.oszk.hu/00300/00355/html/index.html　語源集は第 12 巻まで刊行済みである。
[51] この講演内容はクルジュ〔コロジュヴァール〕で 1936 年から 1944 年にかけて刊行された代表的な社会科学雑誌『信用』の 1938 年第 1 号からの特別号として、トランシルヴァニア博物館協会の学術パンフレットシリーズから刊行された。本稿ではこのパンフレットを参照した。
[52] Szabó T. Attila, *A transylván magyar társadalomkutatás*, Cluj, Gloria Könyvnyomda, 1938, 21-22.

は、学術研究に触発されて学問を志す人が現れ、その人たちが必要な指導を受けることで学術研究に従事する人になりうると考えていた[53]。特に指針の不在に関して、彼は社会研究の問題を指針にもとづく計画に組み込むような唯一のハンガリー系学術組織・機関がトランシルヴァニアに存在しないことを挙げた[54]。また彼は、社会研究は現在の社会問題の検証だけでは不十分であり、歴史学的な関心を超えてなお現代的であるような問題を偏りなく明らかにすることが絶対に必要であるとも考えた[55]。

以上から、サボー・T・アティッラは 1920 年代末からトランシルヴァニア博物館文書館を拠点としてハンガリー語の歴史や方言の研究を行う中で、トランシルヴァニアにおける社会研究には学術研究を進めていくための様々な指針の策定と研究者の育成の両方が必要であると考えるようになったことがわかる。そして、この社会研究では時代を通じて重要な問題を検証することが必要であるとも彼は主張した。但し、彼はそうした指針の策定に関して、当時の彼らの状況では全般的な解決は非常に困難でほぼ不可能な課題であると述べており[56]、ルーマニア統治下のトランシルヴァニアでハンガリー語による社会研究が非常に厳しい状況にあると彼が認識していたことが読み取れる。

2.3. 第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールの学術機関とその活動

ここでは、第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールの学問環境に対するサボー・T・アティッラによる評価を検証する。この時期のコロジュヴァールにおける代表的な学術組織・機関としては、トランシルヴァニア博物館協会、コロジュヴァール大学、トランシルヴァニア学術研究所の三つが挙げられる。

① トランシルヴァニア博物館協会

この三つの中で最も長い歴史を有したのがトランシルヴァニア博物館協会である。トランシルヴァニアは 17 世紀末にオスマン帝国領からハプスブルク領となった後もトランシルヴァニア侯国としてハンガリー王国と並存していた。トランシルヴァニア侯国では 18 世紀からハンガリー文化にまつわる文物の収集や学術組織の形成の試みが見られ[57]、1841/43 年のトランシルヴァニア議会でコロジュヴァールにハンガリー国民博物館の設立が決定された[58]。実際にトランシルヴァニア博物館の設立集会が招集されたのは 1859 年 11 月である[59]。

同協会の第一の目的は博物館の設立とその維持だったが、1872 年にコロジュヴァールに大学が設立されると、協会は運営機能を残しながらも文書史料、手稿、図書館の古い資料、考古学史料などのコレクションについては大学（すなわち国家）へ管理を譲渡する代わりに利用料を受け取ることになった[60]。博物館協会では 1879 年に歴史学部門と医学・自然科学部門が設けられ、前者は 1918 年まで機関誌『トランシルヴァニア博物館』を刊行した[61]。1906 年には規約の改正で、博物館を維持すること、博物館の豊

---

[53] *Ibid.*
[54] *Ibid.*
[55] *Ibid.*, 20.
[56] *Ibid.*
[57] Szabó T. Attila, *Az Erdélyi Múzeum-Egyesület története és feladatai*, Kolozsvár, Az Erdélyi Múzeum-Egyesület Kiadása, 1942, 6-14.
[58] Szabó T. Attila, „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, *Hitel*, 6-7.köt., 1940-41, 2.sz., 184.
[59] *Ibid.*, 26.　当初の機関名は„Erdélyi Múzeum Egylet”だったが、後に公式に„Erdélyi Múzeum-Egyesület”が使われるようになった。Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 184. jegyzet 1.
[60] Szabó T., *Az Erdélyi Múzeum-Egyesület története és feladatai*, 32.
[61] *Ibid.*, 36.

富な文物を各部門あるいは出版物で取り上げること、祖国ハンガリーに関する知識とハンガリーの学問全般を洗練させることが博物館協会の活動目的とされ、各会員は人文学・言語学・歴史学、自然科学、医学、法学・社会学の 4 部門のいずれかに属することになった[62]。

戦間期の博物館協会はルーマニア政府からの干渉を受けて組織的な活動ができなかったが、1930 年からは毎年、冬に 25 から 30 の啓蒙活動的な連続講演を、夏には地方のハンガリー人都市で当局から講演を拒否されなければ移動集会を開催した[63]。『トランシルヴァニア博物館』も 1930 年から刊行が再開され、「トランシルヴァニア学術パンフレット」シリーズの刊行も始まった。サボー・T・アティッラはこうした活動が行われた時期を「トランシルヴァニア博物館協会の活動の英雄的な時期であった」と回顧した[64]。

サボー・T によれば、第二次ウィーン裁定後のハンガリーの学術政策および、より一般的な教育政策は、トランシルヴァニア博物館のコレクションに対して大いなる価値を見出し、博物館協会の将来に多大な期待を寄せた。その結果、博物館協会は、大学による博物館の保管庫の利用の代償としてハンガリー国家から受ける財政支援と自らの収入を利用することで、第一の課題であるトランシルヴァニア博物館の所蔵品の拡大と管理が可能となった[65]。その上で、彼はトランシルヴァニア博物館協会のこれからの時期の最重要課題を「トランシルヴァニア博物館をトランシルヴァニアのハンガリー人および一般的に全てのトランシルヴァニアの教育の諸価値にとって誇るべき貯蔵庫とすること」であると考えた。彼は、この目標設定ゆえに、トランシルヴァニア博物館はトランシルヴァニア・ハンガリー国民博物館としてコロジュヴァール大学の諸機関からは切り離されて自立せねばならず、博物館の自立はトランシルヴァニアのハンガリー人の自信を高めるために絶対に必要であると主張した[66]。

但し、彼は博物館協会固有の目標をトランシルヴァニア博物館のコレクションの拡大、管理、ある程度の再分類、改善のみに置いていたわけではなく、機関としての学術的な専門教育も博物館協会の重要な課題であると考えていた。彼によれば、博物館協会の「最も初めの課題とは、コレクションにおける膨大な隠れた民族的および学術的諸価値を分析して然るべき形で刊行すること」であり、このような方法を通じてトランシルヴァニア博物館の諸価値は民族の、更には国際的な宝物とならねばならなかった[67]。その第一歩とは博物館協会が既に取り組んできた学術的な諸成果の普及であり、普及のための連続講演や移動集会によって博物館協会が再びトランシルヴァニアの博物館の維持と学術教育を支援する社会を形成するようになるのである[68]。

以上から、サボー・T・アティッラの考えるトランシルヴァニア博物館協会の役割とは、文物の収集や保管を通じてトランシルヴァニアのハンガリー人の精神的な拠り所となる自立した国民博物館を維持すること、およびコレクションの分析を通じて明らかにされた学術的な価値を大衆にも普及させることであった。彼は、そうすることでトランシルヴァニア博物館が（トランシルヴァニアのみならず）ハンガリー民族、更には国際的にも価値あるものとして見なされることになると考えたのである。

---

62 *Ibid.*, 39-40.
63 Szabó T., *Az Erdélyi Múzeum-Egyesület története és feladatai*, 51-52.
64 *Ibid.*, 52.
65 Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 185-186.
66 Ibid., 186.
67 Ibid.
68 Ibid.

② コロジュヴァール大学

①からも判るように、コロジュヴァール大学とトランシルヴァニア博物館協会との間では、トランシルヴァニア博物館が所蔵するコレクションの利用をめぐる取り決めの存在や、教育機関としての役割の重複が見られた。このため、1872 年のコロジュヴァール大学の設立以来、戦間期のルーマニア統治の時期を除いて、両者の間では目に見える形で問題が生じていた[69]。この状況に対し、サボー・T は、コロジュヴァール大学の課題は学術教育〔tudósnevelés〕ないしは最低でも真剣に訓練された専門家の育成〔komolyan felkészült szakemberek nevelés〕であり、この点でトランシルヴァニア博物館協会および後述するトランシルヴァニア学術研究所の目標設定と相反しないと考えていた[70]。

一方で、彼は博物館協会によるトランシルヴァニアのハンガリー人の間での民族的な学術研究への貢献も重視していた。彼によれば、学術教育は機関としては大学に属するが、学術研究は大学外での偶発的で個人的な作業であり、大学外の諸機関においてのみ実現できるものであった。これらの諸機関では大学に勤める教員と補助的な学術要員たちが大学外で活動する研究者たちと結びつくことができ、民族的な学術研究は、このように知識人階層を結びつける精神的な試み、すなわち民族の結束や社会の連帯を助ける文化政策の要素となると彼は考えた[71]。トランシルヴァニアのハンガリー人の世界では、トランシルヴァニア博物館協会のみがこうした機関としての伝統や実践を有していると彼は見なした。彼曰く、博物館協会はその諸部門（人文学・言語学・歴史学、法学・社会学、自然科学、医学）に属する諸組織の弾力性のおかげで、社会的立場や大学の学科、一般的にあらゆる外部要素から独立したトランシルヴァニアの学術研究の諸課題への従事に特に適していた[72]。こうした状況分析にもとづき、サボー・T は、トランシルヴァニアの学術研究については大部分が、学術研究の能力ある者たちが博物館協会の枠組みで用意される諸可能性をどのように利用するか、同時にその可能性の利用とは民族の精神生活を豊かにすることや、民族の知識層の望ましい形で統合することをどれだけ理解できるか次第であると考えた[73]。

以上から、サボー・T・アティッラは、コロジュヴァール大学の役割を学問教育ないし専門家の育成に見出す一方で、博物館協会によるトランシルヴァニアのハンガリー人の間での民族的な学術研究への貢献を重視し、大学の枠組みを越えて研究者たちがトランシルヴァニア博物館協会を介して結びついてハンガリー民族的な学術研究が行われることによってハンガリー人としての民族的な結束や社会の連帯につながること、トランシルヴァニア博物館協会の様々な枠組みを利用することによってハンガリー民族の精神生活の涵養や知識層の統合につながることを指摘していた。

③ トランシルヴァニア学術研究所

サボー・T によれば、トランシルヴァニア学術研究所はコロジュヴァール大学ともトランシルヴァニア博物館協会とも異なって本質的には学術研究の機関であり、そのために大学から独立した組織によって形作られていた。しかしながら、同研究所の研究は、研究所内に限られたものではなく、トランシルヴァニアのあらゆる生活領域で進んでいた。研究所員についても宗教・公教育相によって一部は大学の教員たちから、一部はその価値あるハンガリー人研究者たちから指名されていた[74]。

---

[69] Ibid., 187.
[70] Ibid.
[71] Ibid., 187-188.
[72] Ibid., 188.
[73] Ibid.
[74] Ibid.　但し、サボー・T はこの論考で、当時はトランシルヴァニア学術研究所の組織が未形成だが、業務や

トランシルヴァニア学術研究所の研究は、個別研究と共同研究という二つの特徴を持っていた。全ての所員は自身の個別の研究業務を遂行するが、それだけでなく、同研究所の上位に位置する当局、指導者たち、所員たちが等しく、それぞれの領域で取り組む者たちが互いにその諸成果を考慮したり、互いに研究を支援したりしながら、トランシルヴァニア世界の幅広い分野を検討するように努力することも目的とされた。研究所の諸計画によれば、この共同研究の目的に近づくために、研究所員たちと招集された専門家たちが、毎年夏にいくつかの地域で集団での学術調査を行うことになっていた[75]。

サボー・T は、例として 1941 年夏にコロジュヴァール近隣にあるルーマニア人が多数派を占めるコロジュボルシャとその周辺諸村で最初の調査が予定されていることを紹介する。これらの諸村が最初の調査地となったのは、コロジュヴァールに近接しているため、および人民と社会の関係が興味深いためで、民族学者、方言研究者、統計学者、民族研究者の集団が訪れることになっていた[76]。これがトランシルヴァニア学術研究所の活動の代表例として言及されるボルシャ谷の学術調査へと発展する[77]。

サボー・T はこの学術調査に期待を寄せる一方、トランシルヴァニア学術研究所とは専門家たちの仕事を支援して諸成果を公表する研究機関であるだけでなく、毎夏に行われる学術調査とそれに続く分析の時期には、大学で成長する若者たちに対して学問的な実践の可能性を提供する機関でもあると位置づけた。すなわち、研究所に指名された大学の教員たちは、助手として優秀な学生たちを夏季の学術調査に送り出し、彼らが大学で理論的には修得していた研究手法を実践する機会を紹介し、その後の資料分析の際に方法論の理解によって能力ある者たちを見分けるのである。また、同様にトランシルヴァニア学術研究所はトランシルヴァニア博物館協会とも関わりを持っていると彼は考えていた。彼曰く、歴史的な性格を持つ研究において学術研究所は博物館協会のコレクションに依存しており、まだ探究されていない学問的諸価値を公にするという形で博物館協会を助けていたからである[78]。トランシルヴァニア学術研究所のコロジュヴァール大学、およびトランシルヴァニア博物館協会との関係について、サボー・T は「大学と研究所の間では、個人的な関係を超えた学術研究のための教育が、博物館協会と研究所の間では互恵的な相互依存が継続的で健全な関係を保障しうる」と考えていた[79]。

以上から、サボー・T は、トランシルヴァニア学術研究所をコロジュヴァール大学やトランシルヴァニア博物館協会とは異なる独自の研究機関であると同時に、活動の延長で両機関と協働してトランシルヴァニアに関する教育と研究の両面で寄与する存在として位置づけていたことがわかる。

活動は既に始まっていたと記した。Ibid.　次に述べる 1941 年夏の調査の計画を「この夏に」と書いていること、および 1945 年のモノグラフによれば 1941 年春に既に調査を行っていることから、1941 年初旬の状況を指したと考えられる。Szabó T. Attila és Gergely Béla (bevezetéssel és jegyzetekkel közzéteszi), *A kolozsmegyei Borsavölgy helynevei*, Kolozsvár, Minerva, 1945, 8.

[75] Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 188.

[76] Ibid.　チョマファーヤ Csomafája〔チョマファヤ Ciumăfaia〕、キデ Kide〔キデヤ Chidea〕、ヴァーラスウート Válaszút〔ラスクルチ Răscruci〕など調査地となった村の多くが代表的なハンガリー人居住村だった。„Borsa-völgy”, Ortutay Gyula (főszerk.), *Magyar Néprajzi Lexikon*, I. kötet, Budapest, Akadémiai Kiadó, 1977 http://mek.oszk.hu/02100/02115/html/1-908.html

[77] コロジュヴァール周辺の農村部を民族学等の見地から調査することは、1930 年代に中央・東ヨーロッパで広まった農村探索の影響を受けて既に行われていた。H. Csukás György - Kecskés Péter, „Bevezetés: Az Erdélyi Tudományos Intézet és a Borsa-völgyi kutatások” in Vargha László, *Kide és a Borsa-völgy népi építészete*, Szentendre, Szabadtéri Néprajzi Múzeum, 5.

[78] Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 189.

[79] Ibid.

2.4. トランシルヴァニアにおける学問と教育

サボー・T は、これら三機関が大局的見地から見ればトランシルヴァニア文化の学術的な調査とその調査を可能にすることという共通の目標に取り組んでいると位置づけた[80]。そして彼は、外部の諸条件[81]のために過去 25 年間損なわれてきたトランシルヴァニアの学術研究が三機関によって新たな力を得ただけでなく、手法において、組織において、そして諸視点においても、更新されて強力になり、トランシルヴァニアの知の問題に従事しているように思われると考えた[82]。2.2.で述べたように、1938 年時点の彼は、ルーマニア統治下のトランシルヴァニアでのハンガリー語による社会研究が非常に厳しい状況にあると認識していた。この状況が第二次ウィーン裁定後に大幅に好転したと彼は考えたのである。同様の見解は彼の晩年（1979 年）にも示されている[83]。

そこから彼は「積年の高貴なトランシルヴァニアの伝統から出発する学術研究が、真実の追究においても、対外強硬主義になったり偏見を持ったりすることなしに民族的であり続けることが期待される」と主張する[84]。彼によれば、トランシルヴァニアの伝統から出発する学術研究が民族的となるのは、その学術研究がハンガリー人民の痕跡を歴史的トランシルヴァニアの地域、更にはそれを超えて弛まず探究し、トランシルヴァニアの物質文化および精神文化の形成における他の非ハンガリー系のトランシルヴァニア人民の役割を党派的だったり偏ったりすることなく定める時であった[85]。すなわち、サボー・T は歴史的トランシルヴァニアにおけるハンガリー文化の調査として当時の宗教・公教育相の支援も受けて開始された学術研究が客観性を維持し続け、研究の対象が地理的に拡大するのみならず、非ハンガリー系住民も含めて客観的にトランシルヴァニアの物質・精神文化を評価するまでに拡大することを期待した。ここから、彼がトランシルヴァニアにおける農村社会の調査を通じた学術研究によって、トランシルヴァニアを当時のハンガリー政府の見解を反映してハンガリー文化圏の一角として位置づけるのではなく、非ハンガリー系住民も含めた文化的多様性を持つ領域として位置づけようとしていたことが指摘できる。

3. トランシルヴァニア学術研究所への批判

2.では第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールにおける学術機関の諸活動の特徴とそこから見える活動理念およびトランシルヴァニアの文化的独自性の認識についての 1941 年初旬のサボー・T の見解を整理した。しかし、彼の 1945 年のモノグラフ『コロジュ県のボルシャ谷の地名』で調査対象地に関して「遠方の地域、主にセーケイフェルドの調査については当時既に到来していた戦争の接近と食料難、軍の召集のために〔トランシルヴァニア学術〕研究所は更に大規模な計画を用意することができなかった」と述べられているように[86]、実際の活動では社会情勢などにより様々な制約があったことが推測される。

---

[80] Ibid.
[81] 明記はされていないが、ルーマニアの統治下にあったことを指すと考えられる。
[82] Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 189.
[83] Szabó T. Attila, „ Az erdélyi magyar nyelvtudomány kérdései” in Szabó T. Attila, *Nép és nyelv: Válogatott tanulmányok, cikkek IV*, Budapest, Kriterion Könyvkiadó, 60-61.
[84] Szabó T., „Az erdélyi tudománypolitika kérdéséhez”, 189.
[85] Ibid.
[86] Szabó T. Attila és Gergely Béla, *A kolozsmegyei Borsavölgy helynevei*, Erdélyi Tudományos Intézet, Minerva Irodalmi és Nyomdai Műintézet RT., Kolozsvár, 1945, 8.

また、宗教・公教育省主導で設けられたトランシルヴァニア学術研究所の活動に関する批判も現れた。その代表例が、チャーンゴー人に関する著作もある若手民族学者ミケチ・ラースローがトランシルヴァニア博物館協会から 1944 年に発表したパンフレット『新しいトランシルヴァニアの学問：トランシルヴァニア学術研究所の活動への注釈』である[87]。彼はトランシルヴァニア学術研究所の研究活動について、諸分野による共同調査の成果の概略をまとめて総合的に取り扱う研究が必要であると主張し、そうした研究は対象地への訪問だけでなく年単位でその地域に暮らして調査を行うことで可能となると述べた[88]。同時にミケチは、学術研究者が人民の擁護者になろうということではないと断りながら、ハンガリー人についてのより良い、より真実に近い像を生み出し、その像に従って自分たち〔ハンガリー人〕が生活の中で改善したり変化したりするために研究が続いていくのだと述べた。彼はこうした研究が行われている例としてフィンランドを挙げる[89]。そしてトランシルヴァニア学術研究所の指導部に対して、真理の探究やハンガリー人の精神の刷新を可能とする研究を特権的に担っていることへの責任感の自覚を求めた[90]。

ミケチのパンフレットの最後には『トランシルヴァニア博物館』編集部からの注釈が添えられていた。先述のように、同誌の編集ではサボー・T・アティッラも主導的な役割を果たしていた。注釈では、これまでトランシルヴァニア博物館協会がトランシルヴァニア学術研究所について言及してこなかった理由が二点挙げられていた。ひとつの理由は、トランシルヴァニア学術研究所の初代所長タマーシュ・ラヨシュが同誌編集部との間で、何らかの研究により客観的な批評を伴って賞賛されうる研究成果を出すまでは、学術研究所についての回顧は時期尚早であろうと合意していたからである。もうひとつの理由は、学術研究所の活動の周知、評価、賞賛のために誰であれ依頼されることが同誌編集部にとって学術研究所との関係を長らく微妙なものにしていたからである[91]。

しかし、その年（1940 年）の内に学術研究所の活動が様々な面で批判されるようになると、『トランシルヴァニア博物館』編集部はトランシルヴァニアで最も古い学術雑誌である同誌上で学術研究所での活動を論評しないようにせざるをえないと考えるようになった。この状況に責務を覚えたミケチは 1944 年 5 月に編集部にパンフレットの原稿を送付したのである[92]。これに関して、当時の同誌編集部がタマーシュと合意して学術研究所の活動への賞賛のみならず批判的な見解もミケチから出されるまで待っていたのはほぼ不必要だと現在の編集部が考えている旨も表明されており[93]、トランシルヴァニア博物館協会がその歴史と研究の質に強い自負を持っていたことをうかがわせる。

また、学術研究所初代所長のタマーシュが近く退任する見通しでもあったので、ミケチの原稿は学術

---

[87] Mikecs, László, *Új erdélyi tudomány: Jegyzetek az Erdélyi Tudományos Intézet működéshez*, Kolozsvár, Az Erdélyi Múzeum-Egyesület Kiadása, 1944.
[88] *Ibid.*, 25.
[89] *Ibid.*
[90] *Ibid.*, 25-26. ここで彼は「もしトランシルヴァニア学術研究所が、〔ハンガリー人の〕音楽におけるバルトークの名前、更にはコダーイの名前や、〔ハンガリー人の〕文学における我々の人民作家の名前と同じものをトランシルヴァニア学術研究所の名がハンガリー人の学問において意味できることを理解するなら」という表現を用いた。バルトーク、コダーイ、人民作家はその調査手法から土着的なハンガリー文化と結びつく存在として位置づけられる。上述のように彼は調査対象地で長期間生活した上で研究を行うことの重要性を指摘しており、ここではトランシルヴァニア学術研究所の夏季調査では調査対象地に根ざした理解が不十分であることが示唆されている。
[91] *Ibid.*, 26.
[92] *Ibid.*
[93] *Ibid.*

研究所の第一期の終わりに合わせて1944年6月に刊行されるはずだったが、「例外的な諸関係〔a rendkívüli viszonyok〕」ゆえに印刷所と編集者が手を引いてしまい、刊行は最も早くて同年 10 月になった[94]。『トランシルヴァニア博物館』編集部は、学術研究所の指導部が 7 月に改編されたので、それ以降に起きた出来事のためにいくつかの点は修正あるいは書き換えを著者に促すかもしれないが、刊行されたパンフレットの内容は5月の時点から変更がない旨を最後に断っている[95]。

ミケチのパンフレットおよびそれに添えられた『トランシルヴァニア博物館』編集部による注釈からは、トランシルヴァニア博物館協会がトランシルヴァニア学術研究所の研究活動の質に対して強い不満を抱いていたにもかかわらず、両機関の間での政治的関係により批判が難しかったことが読み取れる。ミケチはそうした状況を是正する責務を感じて学術研究所を批判するパンフレットを執筆した。彼は、学術研究所による夏季の共同調査が対象地に根ざしておらず、個々の研究成果を総合的に取り扱うものではないことを批判するとともに、調査対象地に根ざした研究成果を通じてハンガリー人の精神の刷新が可能になることを指摘し、学術研究所がそうした研究を特権的に担っている責任への自覚を求めた。トランシルヴァニアに関する真理を探究する総合的な研究がハンガリー人の精神、ひいてはハンガリー人の刷新につながるというミケチの主張、ならびにトランシルヴァニア博物館協会による自組織の歴史とその研究の質への強い自負には、トランシルヴァニアの文化的独自性の認識とその独自性のハンガリー人全体への還元を目指す姿勢が表れていた。

おわりに

第二次ウィーン裁定以前から、ハンガリーはトランシルヴァニアの領有を学術的に正当化するためのプロパガンダ活動を行っていた。第二次ウィーン裁定ではトランシルヴァニアの北部のみがハンガリー領となったが、宗教・公教育省はハンガリー文化圏の一角としてトランシルヴァニアを位置づけようとする施策を試みた。コロジュヴァール大学の「再開」とトランシルヴァニア学術研究所の設置はその一環であった。

サボー・T・アティッラは、トランシルヴァニアの文化的中心都市でありながらルーマニアとの国境線にも近かったコロジュヴァールでの学術研究において重要な役割を担った研究者の一人であった。彼は、1940 年 11 月以降にコロジュヴァールに鼎立した博物館協会、大学、学術研究所が相互補完的な機能を有すると考えながら、トランシルヴァニアにおける農村社会の調査を通じた学術研究によって、ハンガリー文化圏の一角としてではなく、非ハンガリー系住民も含めた文化的多様性を持つ領域としてトランシルヴァニアを位置づけようとした。彼は、戦間期のルーマニア統治時代のトランシルヴァニアではハンガリー語による社会研究が非常に厳しい状況にあったと認識しており、第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァール大学の「再開」とトランシルヴァニア学術研究所の設置、および様々な形でのハンガリー国家からの支援という研究環境の大きな変化を好意的に受けとめた。

一方、19 世紀半ばからコロジュヴァール〔クルジュ〕を拠点に活動してきたトランシルヴァニア博物館協会にとって、トランシルヴァニア学術研究所による研究活動は不満の多いものであったにもかかわらず、同研究所を批判することは難しかった。ミケチ・ラースローによる学術研究所を批判したパンフ

[94] *Ibid.*
[95] *Ibid.*

レットがサボー・T・アティッラも機関誌の編集に携わる博物館協会から最終的に刊行されたことは、両機関の関係性を大きく変えうるものであった。

しかし、1941 年当時のサボー・T・アティッラの主張と 1944 年のミケチ・ラースローの主張を比較すると、確かにトランシルヴァニア学術研究所に対しては正反対の評価であるが、どちらもトランシルヴァニアにハンガリー本国と異なる文化的独自性を見出し、それを農村社会の調査を通じて学術的に探究することでハンガリー文化圏全体に寄与ことを訴えている点で共通している。彼らはハンガリー・ナショナリズムにもとづくハンガリー文化圏の一体性を認識していたが、土着的な学術研究を通じてトランシルヴァニアの文化的多様性という独自の特徴とこの一体性を結びつけることで、新たに文化的最前線としてのトランシルヴァニアという空間が認識されていったのである。

Contribution to the Hungarian National Unity through the Transylvanian Local Identity: A Comparison of the Three Academic Institutions in Kolozsvár after the Second Vienna Award (1940-44)

TSUJIKAWA Noriko

This paper discusses the tension over cultural identification of Transylvania between local intellectuals of Kolozsvár [Cluj] and the Hungarian government during the period from the autumn of 1940 to the summer of 1944, when Hungary regained and kept control over the northern part of Transylvania following the Second Vienna Award. This paper examines a linguist Szabó T. Attila's articles on the three academic institutions: the Transylvanian Museum-Association [Erdélyi Múzeum-Egyesület], University of Kolozsvár and Transylvanian Scientific Institute [Erdélyi Tudományos Intézet--hereafter ETI]. It also reviews an ethnographer Mikecs László's pamphlet on ETI. Although the evaluations on ETI by these researchers are contradictory to each other, both recognise the local uniqueness of Transylvania as having a potential for contributing to the cultural and spiritual development of the whole Hungarian nation.